

わたしは失われた羊のように迷い出ました。
あなたのしもべを捜し出してください。
わたしはあなたの戒めを忘れないからです。 (詩篇119の176)

I have strayed like a lost sheep.

Seek your servant, for I have not forgotten your commands.

この聖句を含む詩篇119篇は、詩篇の中でも最も長い詩で、上記の聖句は、その最後の言葉である。日本語訳聖書においても、10頁にもなる分量で書かれている。しかも、その内容は、一貫して神の言葉に関しての詩であり、これほどまでにたくさん書かれているのは、ほかに例のないものである。神の言葉がいかなる性質を持っていて、自分と神の言葉がいかに深く結びついているかが、実に多様な表現で繰り返し記されている。神の言葉に関して次々と泉のようにあふれる内容がそこにはある。その最後の締めくくりとして、上記の言葉が置かれている。このことは、この詩の作者がこの聖句の内容を特に重要だとみなしていたことを示すものである。

それは、人間の弱さを深く知っていたこと、それに対して神の言葉だけが、その弱さにうち勝つ力を与えてくれるのだということである。ここで言われている「戒め」とは、神の言葉である。この詩篇では、「神の言葉」は、教え、戒め、律法、定め、命令等々さまざまな言葉で訳されている。詩であるから同じ言葉を使わず、より内容を浮かびあがらせるため、こうした用語においても多様なものが用いられている。

私たちは、誰でも本来は迷いでた存在なのであり、ごく一部の人だけが迷える羊なのではない。正しい道、天の国への道から個人も民族、国家も常に迷いでいるのがその実態である。そしてその迷い出た状態はそのままでは、ついに滅びに至る。

苦しい病気に伏せるとき、また、人間関係で見捨てられ、傷つけられた魂、また若くて体は健康であっても、生きる目的がわからなくなり、生きていけなくなることもあり、そのような場合は一層 孤独な迷い出た羊となっていく。

そしてそれは、何不自由なく元気にすごしていると思われる人にも突然襲ってくることもある。

この詩の作者にとって、み言葉はそうしたときでも最後の頼みの綱というべきものであった。神の戒め—み言葉を忘れないで、すがっているゆえに、神の助けは必ずくる、探し出してください—どこにも道がない、と思われるときでも探し出して救い出してくださいというのがその確信であった。

神の言葉がいかに重要であるか、それは、失われた一匹の羊がそこから救い出されることと深く結びついているからである。

迷い出た羊を探し求める神の愛については、主イエスがたとえで語られたことはよく知られている。この詩の作者は失われた者への神の愛をイエスより何百年も昔にすでに実感していたのがうかがえる。

…あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。

その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。

…罪人が一人でも悔い改めたら、天において大きな喜びがある。 (ルカ15の4)



これは、今年の7月、舞鶴港から、北海道の南西部にある瀬棚での聖書集會に参加のため、小樽に向うフェリーで撮影したものです。青い空、そしてただ大海原だけが広がるなかに、真っ白い泡をたてて真っ直ぐに進む船の後にできる大いなる道—この青くて白い大路は、私たちの心を天の国へと導く真っ直ぐな道へと思いを誘ってくれたのです。

聖書には、荒野、砂漠地帯における道について記されている箇所があります。

「…そこに大路が敷かれる。その道は聖なる道と呼ばれ、汚れた者がその道を通ることはない。…」(イザヤ書35の8)

この世界が全体として向っている神の国への道、それはいかなる人間的な産物もそれを汚すことも壊すこともできない。神ご自身がそこに敷かれたものだからです。

「…すべてのものは、神から出て、…神に向っている。」(ローマの信徒への手紙11の36)

とされているとおりです。

この大海原にできた道も、そうした清められた大路を感じさせるものがあります。

この世に生きる私たちにとっては、生きる道は、曲がりくねっており、随所で落とし穴や危険な箇所があります。しかし、目に見えないところにおいては、こうした真っ直ぐな道が、神の御計画によって敷かれています。永遠から永遠へと…。

(文・写真ともT. YOSHIMURA)